

平成27年度 第2回援助会員養成講座

会 場 松阪市市民活動センター・松阪公民館・松阪市産業振興センター
 対 象 松阪市内及び近隣市町に在住する20歳以上の方
 募集人数 30名(先着順)
 受 講 料 無料(但しテキスト代 2,200円が必要となります)
 託 児 無料(1/12(火)は12/21(月)までに 1/29(金)以降は1/21(木)までにお申し込みください。飲み物・おやつをご持参ください)



月日・会場	時 間	内 容	講 師
1月12日(火) 松阪市市民活動センター 松阪市日野町788	10:40~10:50	オリエンテーション	まつさかファミリーサポートセンター アドバイザー
	10:50~12:20	① 保育センターの役割と心得	(特)松阪子どもNPOセンター 理事長 塩谷 明美
	13:20~16:20	② 小児看護	(株)ジェネラス訪問看護ステーション ほたるいせ管理者 岡田 まり
1月29日(金) 松阪公民館 松阪市殿町1563	10:00~12:00	③ 保育の心	育児支援アドバイザー 堀川 美子
	13:00~13:30	④ 松阪市の子育て支援の現状	松阪市福祉事務所こども未来課 こども担当主幹 鈴木 良行
	13:40~15:40	⑤ 子どもの遊び	鈴鹿大学短期大学部生活コミュニケーション学科 こども学専攻特任准教授 山野 栄子
1月31日(日) 松阪公民館	10:00~11:30	⑥ 乳児の暮らしとケア	松阪市嬉野地域振興局地域住民課 保健師 上阪 伸子
	11:40~12:10	⑦ 事業を円滑にすすめるために	まつさかファミリーサポートセンター アドバイザー
	13:10~16:10	⑧ 子どもの栄養と食生活	元三重中京大学食物栄養学科 教授 馬場 啓子
2月4日(木) 松阪市産業振興センター 松阪市本町2176	9:30~12:30	⑨ 子どもの心の発達と障害について	高田短期大学子ども学科 学科長 千草 篤磨
	13:30~16:30	⑩ 子どもの事故と安全・幼児救急法	日本赤十字社三重県支部 富内 直美
2月14日(日) 松阪公民館	9:30~12:30	⑪ 子どもの発育と病気	イワサ小児科 理事長 岩佐 敏秋
	13:30~15:45	⑫ 講座を振り返って	まつさかファミリーサポートセンター アドバイザー

★1時間の利用料金★

★ 援助開始3時間前までに依頼があった場合 ★	
平日 7:00~19:00	700円
平日の上記以外の時間・土日祝日	800円
年末年始（12月29日から1月3日）	1,000円
★ 援助開始まで3時間を切った場合・軽い病児・病後児 ★	
平日 7:00~19:00	1,000円
平日の上記以外の時間・土日祝日	1,200円
年末年始（12月29日から1月3日）	1,400円

★1回あたりの宿泊の利用料金★

22:00~6:00 (連続8時間)	5,000円
年末年始の同じ時間 (12月29日から1月3日)	7,000円



至

至

至

至



まつさかファミリーサポートセンター

〒515-0084 松阪市日野町788 カリヨンプラザ1階
 (特定非営利活動法人 松阪子どもNPOセンター内)

TEL/FAX 0598-20-8246

『あなたの子育て応援します』

2016年1月(第25号)

ファミサポ

ホットタイム

発行元：まつさかファミリーサポートセンター

ステップアップ講座「子どもの時間を共に生きる」

10月12(月・祝)に会員のステップアップ講座として、NPO法人あそび環境Museumアフタフ・バー・バン北島尚志さんをお迎えして講演会を開催しました。

北島さん自らの体験を交えたお話は、わかりやすくて面白かったと大好評でした。会場は終始、笑いに包まれました。しかし、話の内容は楽しいことばかりではなく、日本の子どもが遊べなくなっている現状は深刻なことや、子どもの遊び世界を取り戻すには、大人が場所や時間を保障することが必要だという話には、参加者も真剣な表情で聞き入っていました。

北島さんは、人は遊びの中でこそ育つものであり、とりわけ4~10才の頃のファンタジーと現実を行き来できる頃に遊び込むことで、自分のやりたいことが見えてくるのだと話されました。たとえば「河童の姿を見るにはどうすればいいか」と、大人には思いもつかないようなことを本気で考えて、知恵を出し合い、試行錯誤する子どもたち。いろいろやりとりしながら、お互いを受け止め合って合意形成することこそが遊びであり、遊びを楽しむことで、自分は自分でいいといふ自己肯定感も育ちます。その時に大人が子どもの気持ちを理解して、子どもの時間を共有することが重要なのだそうです。参加者からは「改めて遊びの意味を考えさせられた」「もっと子どものやることを面白がって、共に楽しみたい」などの声も聞かれました。



まつさかファミリーサポートセンターは(特)松阪子どもNPOセンターが松阪市より委託を受けて運営しています



平成27年度

ファミリーサポートセンター講習会・研修会に参加して

講習会

<発達障がいのある子どもの理解と支援>

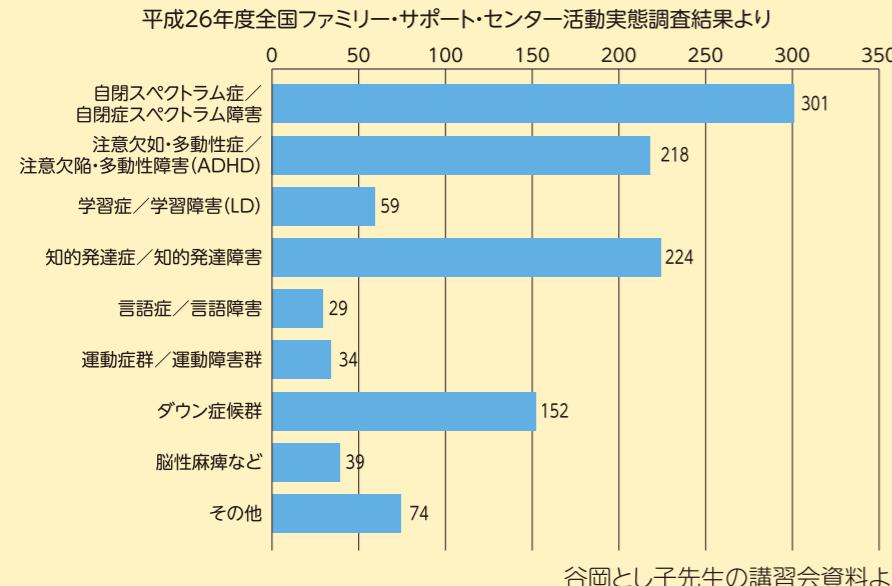
10月1日(木)に一般財団法人女性労働協会が主催する全国アドバイザー講習会・交流会が大阪であり、約100名程度の参加がありました。全体テーマが「ファミリーサポートセンターにおける発達に障がいのある子どもの援助活動の基本」でした。午前中が厚生労働省より20分程度の説明と谷岡とし子先生(大阪発達障害総合支援センター児童発達支援部部長)の基調講演があり、午後からはグループワーク(支援者のためのスタッフトレーニング)がありました。

26年度活動実施調査(図1)から障がいを持つ子どもの送迎や預かり等の援助活動を8割以上の多くのセンターで実施されていることがわかります。当センターでも援助依頼が数件あります。「発達障害」とは生まれつきの脳の機能の違いによる能力の偏りによる障害をいいます。症状が重なっている場合もあり、単に診断名で理解するのではなく、一人ひとりの評価にもとづいた特性の理解が必要だと谷岡先生は大変わかりやすく話され、納得のいくものでした。子どもの様子や話すことは氷山の一角(図2)という話をされました。表面にでている氷山だけで判断するのではなく、水面下にある気持ちにも目を向けて考え、声掛けを考えたいと思いました。支援する子どもたちにとっては

図1 障がいを持つ子どもの援助内容(複数回答)

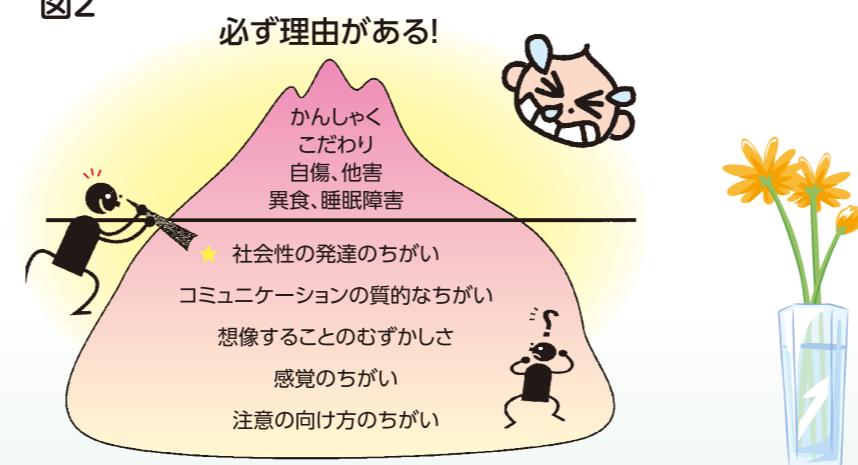


障がいのある子どもの障がい内容(複数回答)



●どこへ行くかわからない ●預かり者との面識がない(少ない) ●自分の家とは違う場所で過ごす ●いつも遊びおもちゃと違う(無い) ●いつまで過ごすのか不明 ●自分の要求や気持ちをうまく伝えられない等から不安な気持ちになります。支援がある時は気を付けてわかるように伝えていく必要があります。例えば子どもたちが「おばさん家のお茶がまずい」とか「おばちゃんが触ったお菓子はバイキンついているから食べない」「おばちゃんとこの車臭い」などと言った時、この子の気持ちは?家で毎日飲んでいるお茶が一番合っているのでこの子にとってよその家のお茶はまずいという表現になったのではないでしょうか。お菓子の件でも自分でいつも袋を開けて食べているかも知れません。私たちはまずこの子は何故こんな事を言うのかを受け止めて具体的・視覚的・肯定的な声かけを考える必要があります。このことは障がいの有無に関係なく人間関係にとって相手を思うということが大切なことだと思います。午後のグループワークは子どもはどんな気持ちなのか考え、どういう声かけをしたらいいかを実践しました。学んだことを当センターの運営に生かしていきたいと思います。

図2



研修会

リスクマネジメント 実践セミナー

～事故・ヒヤリ・ハットの集め方から活用方法まで～

10月30日(金)に大阪であった一般財団法人女性労働協会主催の研修会に参加しました。講師は株式会社インターリスク総研上席コンサルタント梶浦 勉さんでした。リスクマネジメントの基本的な考え方について学びました。

事象が起ったとき隠さずに報告できる下地があることが求められる。大きな事故につながる前には、多くのヒヤリ・ハットの事例が隠れています。その一例として、公園は安全な遊び場と思い込んでいる人が多いのですが、異年齢の子どもが遊んでいたり、年齢にあった遊具ばかりが置いてあるわけではなく、怪我につながるリスクもあるということでした。日頃のヒヤリ・ハットをどう集めるか、アドバイザー間や依頼会員援助会員との信頼関係が重要であり、日頃からコミュニケーションをよくして小さなことでも話し合える環境が本当に大切だと思いました。学んだことを基にヒヤリ・ハットのチェック表が有効に使われているか、できるところから見直していきたいと思いました。

最後に重篤な事故につながった事例をグループワークで分析し、みんなで話し合い事故報告書にそって記入し発表しました。大きな事故になったときは、援助会員の動揺もあり事故の経過を思い出せないケースがあり、一報を受けたアドバイザーの言葉がけも本当に大切だと思いました。

*ヒヤリ・ハットとは重大な事故にはいたらなかったものの直結してもおかしくない一步手前の事例のことを言います。文字通り突発的な事象やミスにヒヤリしたりハッとしたりするもののこと。

- ① リスクマネジメントは組織全体で取り組まなければならない。
- ② 人間は誤りや失敗をするものである。
- ③ 万一事故が起きた場合でも被害を最小限にとどめる努力をする。
- ④ 計画だけでなく資源(ひと・もの・かね)の手当が必要である。
- ⑤ 継続的に改善するより詳細にリスクを考えるうえで大切なことは、年齢に応じた安全チェックリストを作成し、子どもの行動からヒヤリ・ハットの情報を共有する必要がある。